

「素粒子論研究」の 65 年:1948—2012

神奈川歯科大 小沼通二
(「素粒子論研究」元編集長)

内容

- 1 まえおき
 - 2 「素粒子論研究・電子版」の発展のための提案
 - 3 100 巻から 119 巻までの内容
 - 4 ホームページ、著作権、アーカイブ、「素粒子論研究・電子版」の創刊
 - 5 「素粒子論研究」の表紙
 - 6 初期の「素粒子論研究」から見た素粒子論グループの発展
- 付録：素粒子論研究 100 巻から 119 巻までの資料

1. まえおき

1948 年に創刊された「素粒子論研究」は、2012 年に 65 年目を迎えた。

この文章が掲載されている本号で完結する巻は第 119 巻だが、第 0 巻から始まったから、全体で 120 巻になる。この通巻第 746 号（2012 年 2 月）をもって「素粒子論研究」冊子版発行は終わり、今後は 2009 年 3 月 5 日に創刊されたオンラインジャーナルの「素粒子論研究・電子版」だけになる。「素粒子論研究・電子版」には、冊子版と同じ内容のものも載っているが、冊子版の「素粒子論研究」の電子版ではなく、独立した記事の雑誌だとされている。

冊子版の編集・刊行事務は、素粒子論研究編集部が行ってきたが、1952 年からそれぞれの時代に応じ、いろいろの形で理論物理学刊行会のお世話になってきた。特に、1990 年以来、素粒子論グループから理論物理学刊行会に全面的に委託する事業という位置づけになった。

ところが、理論物理学刊行会が発行してきた *Progress of Theoretical Physics* が 2013 年から *Progress of Theoretical and Experimental Physics* に変わり、理論物理学刊行会は解散し、日本物理学会から発行されることになったのに伴い、これまでのままの継続は不可能になった。そして、ほかの委託先に移すこ

となく終焉を迎えることになったのだった。

これまでの 65 年を振り返ってみると、1973 年 10 月号 (48 巻 2 号) の表紙には「25 周年記念号」と書かれている。この号には歴代編集長による寄稿を集めた特集が掲載され、この次の号にも 2 編の追加が掲載された¹⁻²⁾。私はこの時の編集長だった。1976 年 3 月には、創刊号から第 50 巻 6 号 (1975 年 2 月) までの「総目録」(52 巻 7 号) が作られた³⁾。この号のあとがきには、編集委員として植松恒夫さん、小林誠さん、福田礼次郎さんと私の 4 人の名前が載っている。一方、第 21 巻 1 号 (1960 年 3 月) 以後の目次は「素粒子論研究」のホームページに掲載されている⁴⁾。1999 年 11 月号 (100 巻 2 号) には、湯川記念館史料室の名前で河辺六男さんによる『素粒子論研究』の 50 年」が掲載された⁵⁾。

「素粒子論研究」は 3 つの使命を持って創刊された。その中の速報性と日本物理学会の講演予稿という 2 つの役割は確かに時代の変化に伴って消滅した。その上 2007 年には月刊が隔月刊になり、2010 年には季刊に変わった。この面を見て、自然消滅に向かってきたと考える人がいる。

しかし、自由に何でも書けるという創刊以来大切にしてきた性格は、今日まで脈々と引き継がれている。この役割は、今日でも消えていない。私は、「素粒子論研究」を第 4 巻から購読し、読者として、著者として、編集者として、愛惜をもって接してきたので、消滅への道をたどらずに起死回生する方策を探りたい。それはありうると考えている。そこで「素粒子論研究・電子版」の発展への提案を述べ、廃刊される冊子版の「素粒子論研究」への挽歌を綴ることとしたい。

2 「素粒子論研究・電子版」の発展のための提案

「素粒子論研究」は日本の素粒子論研究者が自主的に創刊し、編集し、刊行してきた。第 4 号の表紙には「素粒子論研究グループ」が発行したと明記されている。形式を見ると、その後、刊行は日本物理学会、湯川記念館、基礎物理学研究所、理論物理学刊行会という文字が加わったり、消えたりと変遷したが、編集は創刊以来一貫して素粒子論グループが行ってきた。1960 年には素粒子論

グループの機関誌だと確認し、21巻2号（1960年4月）から表紙に「素粒子論グループ」と書かれることになったが、実質はそれ以前から、素粒子論グループ発行であり続けた。それまでの経過をよくみれば、確認というより再確認というべきだろう。その時以来、冊子版の表紙裏には、「**素粒子論研究は素粒子論グループが発行している同グループの機関誌です。**」と明記されてきた。

「素粒子論研究・電子版」は、素粒子論グループが創った、素粒子論グループのための雑誌であることは疑問の余地なかった。

実際、冊子版と電子版の投稿規定をみると、その最初に同じ文章

「投稿は素粒子論グループのメンバーに限ります。但し、メンバー以外でも、編集部が特に認めた場合には、掲載する場合があります。また、修士論文や講義ノートなど、投稿者が素粒子論グループメンバーでない場合でも、素粒子論グループのメンバーの推薦により投稿を受け付けます。」

が書かれている。

1940年代以来の伝統のある素粒子論グループが、これからも機関誌を持つべきことはほとんど自明だろう。しかし、よく考えてみると「素粒子論研究・電子版」は、冊子版の「素粒子論研究」とは独立した雑誌だったのだから、自動的に機関誌になるわけではなかった。

そこで、機関誌だった冊子版の「素粒子論研究」がなくなるこの機会に、あいまいだったままにすることなく、2012年春の日本物理学会年次大会の際の素粒子論懇談会において

「素粒子論研究・電子版」を素粒子論グループの機関誌とすることを確認する必要があると思う。

しかし確認だけでは十分ではない。これまで冊子版の「素粒子論研究」が機関誌だということは、残念ながら形骸化していた。この文の末尾の付録「素粒子論研究 100巻から119巻までの資料」をご覧くださいと現在の発行部数は280部である。素粒子論グループの会員数と、所属機関数を思い浮かべ、100巻2号（1999年11月）に載っている99巻までの発行部数と比較すると、この機関誌は、会員にも会員所属機関にも届いていない。65年前に、すべて素粒子論研究者の創意と協力から発足した「素粒子論研究」は、名目と異なりすでに瀕死状態になっていたのだった。

組織の機関誌だというなら、会員の手元に届けられるのでなければならなかった。原子核談話会の「原子核研究」や、高エネルギー研究者会議（以前の高エネルギー同好会）の「高エネルギー・ニュース」などは、組織が決定した重要事項が載り、会員に届けられてきたのである。こういって、決定事項はオンラインの s g - 1 に載り、会員は、素粒子論グループのホームページで見ることができるという異論がでるだろう。それは認めるが、機関誌というものは、図書館があればよいというものではない。

これに比べると、「**素粒子論研究・電子版**」は**すでに会員全員の登録したメールアドレスに送られている**のである。

送られてくるだけでは十分ではない。歓迎されるためには、会員にとって興味ある内容が含まれていなければならない。これまで「素粒子論研究」の購読者数が減ってきたのは、興味を持たれなかったからである。ここで注意していただきたいのは、興味を持たれなかったということと、興味深い内容が含まれていなかったということは、同じことではない。（次節以下に、いかに多くの興味深い記事が最近まで「素粒子論研究」に載っていたかを紹介する。）

機関誌の編集者は、会員が興味を持つ記事を増やす責任がある。そのために、「**素粒子論研究・電子版**」**編集委員会を組織することを提案**する。これは、先に述べた「原子核研究」についても、物性研究刊行会が発行する「物性研究」でも行われていることである。かつてと異なり、今日では毎回一か所に集まる必要はない。年に 2 回の日本物理学会の春と秋の大会の時に顔を合わせて討議し、それ以外はメール、ファクス、電話で相談・決定すればよい。さらに、距離の差が問題にならないテレビ会議・電話会議も可能になっている。私が関係してきた AAPPS（アジア太平洋物理学会連合）の機関誌 AAPPS Bulletin は、数年間の不幸な休眠状態を脱し、昨年（2011 年）8 月から隔月刊で安定して発行されているが、国境を越えたテレビ会議によって編集を進めている。私自身についても、最近自宅から Skype を使って遠隔地の会場に参加した人たちに講演を行った経験があり、テレビ会議に参加する経験が次第に増えてきている。

編集委員会が発足すれば、これまでの受け身の編集から脱皮して、依頼執筆を積極的に含めていくことが可能になる。他山の石としてあげれば、最近「物性研究」に掲載された細谷暁夫さんの「戦後に生まれ、物理を志して」⁶⁾や、「原子核研究」の政池明さんの「第 2 次大戦下の京都帝大における原子核研究とその占領軍による搜索」⁷⁾などは、興味深い。さらに「原子核研究」には、生々し

い特集「東日本大震災復旧報告」⁸⁾がまとめられている。これらの委託原稿はどれも「素粒子論研究」の読者にとっても関心のある記事だろう。

後で詳しく見ていくが、「素粒子論研究」の編集は東京で始まり、翌年の1950年から、原則として隔月刊になって東京と京都で交互に編集し、1952年初めから月刊として編集に神戸大、名古屋大、大阪市大が加わった。その年の夏、京大に湯川記念館が完成し、助手2名が着任し、「素粒子論研究」の発行は湯川記念館内で行われるようになって、編集長は初代の助手の吉田思郎さんと川口正昭さんが相次いで務めた。基礎物理学研究所の発足は翌年のことである。それ以来、編集長は基礎物理学研究所の所員が受け継ぎ、今日に至っている。基礎物理学研究所の中に置かれていた理論物理学刊行会がなくなるということは、「素粒子論研究」にとってみれば、基礎物理学研究所発足前の状態に戻るだけのことであり、各地の研究者が編集に参加する道がおのずからできたということでもある。

編集委員には、各地からボランティアを集め、必要に応じて依頼・補足すればよい。メンバーが固定化しないためには、当面任期を、たとえば原則として3年として、一部は新人に交代しながら継続性も維持していくことが望ましい。

「素粒子論研究・電子版」を素粒子論グループの機関誌として継続していくために**維持に必要な経費は、素粒子論グループの会費から支出すべきである。**冊子版維持の経費に比べてはるかに少額ですむので、現在の活動の支障にはならない。

補足として、「**研究会報告**」についての希望を述べさせていただきたい。「研究会報告」には、参加できない読者に対するサービスと、予算を配分されて開催した研究会についての説明責任の役割がある。研究会世話人は、読者がすべて専門家ではないことにもっと留意していただきたい。「研究会報告」の最初に、その研究会でのハイライトがなんであったのか、このテーマの最近の状況がどうであるのかを、世話人の責任で、できるだけわかりやすく、要約していただけると、その分野のPRにもなり、広い読者をひきつけることもできるのではないだろうか。

3. 100巻から119巻までの内容

以前の「25周年記念号」と『素粒子論研究』の50年」が、99巻までの内容を踏まえて書かれているので、まず100巻から119巻までの15年間の内容を、それ以前との関連にも触れながら、順を追って見てみよう。研究会報告と論文とは、ふつう欧文の専門誌に最終版が掲載されることになるので、特別の場合以外、取り上げない。

この20巻は1999年10月から2012年2月にかけて発行された。この時期の「素粒子論研究」には次の内容が含まれている。

論文

研究会報告

地域スクール報告

講義ノート

ノーベル賞記念講演（2008年12月8日にストックホルム大学で行われた益川敏英さんの講演の日本語版⁹⁾。講演と同じ月に発行された号に掲載されたことに注意していただきたい。）

翻訳

放談室（10巻2号より今日まで。文献5）に経過説明がある。）

ひろば（「放談」でないものが放談室に掲載することをさけたいと考えて、「物性研究」にならって確か95巻の時に新設されたコーナー。）

追悼

素研編集部からのお知らせ

これらが最近の「素粒子論研究」に含まれる内容である。「放談室」や「ひろば」を中心にして内容をみていこう。私は、この機会にこれら20巻を通して振り返ったのだが、個別に見ていた時と異なり、予想以上に新鮮な感覚で眺望することができた。

以下の文章で出典、所在が分かるものは、いちいち参考文献のリストに載せることは省略する。これまでのすべての文章は、後で述べる国立情報学研究所のアーカイブ CiNii（サイニィ）で全文を読むことができる。

100巻1号は1999年10月に発行された。この号の内容は、研究会「新時代を迎えてのフレーバー物理」の報告と、「1998年度 原子核三者若手夏の学校素粒子パート 講義録」である。素粒子論グループの若手夏の学校第1回は、

1955年8月に京都大学の若手が事務局を務め、長野県木崎湖畔で開催され、私も参加した。それ以来続いてきた行事である。

翌月の100巻2号には、最初に述べた『**素粒子論研究**』の50年」が掲載されている。103巻6号の「ひろば」には田中正さんの「**湯川博士の物理学**」がある。これは2000年2月に基礎物理学研究所で開催された湯川秀樹博士ノーベル賞受賞50周年記念講演会をベースにして修正加筆した記録である。

107巻4号(2003年7月)から116巻5号(2008年12月)まで、飛び飛びに矢野忠さんの「**武谷三男博士の業績リスト**」と「**武谷三男博士の著作目録**」が載っている。2010年の最近版は「素粒子論研究・電子版」にある¹⁰⁻¹¹⁾。これらは2011年に生誕百年を迎えた武谷さんの業績を振り返る貴重な資料となった。

112巻6号(2006年3月)の236ページに及ぶ青木健一・坂東昌子・登谷美穂子編「**学問の系譜—アインシュタインから湯川・朝永まで—**」と115巻6号(2008年2月)に掲載された全体で404ページの青木健一・坂東昌子・九後汰一郎編「**基礎物理学の現状と将来—学問の系譜・湯川・朝永をうけて—**」は、基礎物理学研究所で開催された、2005年11月7-8日と2006年11月16-18日の研究会の録音から起こした完全な記録である。「素粒子論研究」と「物性研究」に掲載され、定期購読者以外にも広く読まれた。

おそらくこの编者たちは知らないのではないかと思うが、初期の「素粒子論研究」には、湯川先生がノーベル賞受賞後初めて帰国した時(1950年8月)の東京と京都での会の記録¹²⁻¹³⁾や、基礎物理学研究所の研究会における湯川先生や坂田昌一先生の話の録音しておこした、臨場感あふれる記録がいくつも載っている。論文を読むだけでは得られない内容がこれらの記録には含まれており、のちの世に残されたかけがえのない史料になっている。今回の二つの記録も、いつまでも読み継がれる価値があると思う。

113巻3号(2006年3月)には青木健一・伊藤克美・登谷美穂子編「**牧二郎記念シンポジウム**」がある。これは基礎物理学研究所主催で2005年11月5日に行われた牧二郎さん(1929-2005)を追悼するシンポジウムの講演と「牧先生を偲ぶ会」の記録である。

113巻5号(2006年8月)の「ひろば」には五十嵐尤二さんと登谷美穂子さんの「**基礎物理学研究所 設立と将来**」が掲載されている。これは、1997年の京都大学創立百年と2004年の国立大学の国立大学法人への移行を踏まえて、1953年の基研創立から1990年の広島大学理論物理学研究所との合併までの理念と

歴史を振り返り、国立学校法人化に際して、共同利用研究所の法的根拠が失われるという大きな問題を残したことを記録した貴重な分析である。これに続き「**基礎物理学に関する年表(ver.2006.8.1)**」がある。著者は、科学研究費「科学教育における IT を活用した歴史教材＝『仮想博物館』の開発」にかかわった青木健一さん、五十嵐尤二さん、伊藤克美さん、遠藤理佳さん、登谷美穂子さんと私の連名である。完成品というつもりはなかったが、公表して批判と助言をいただき、さらなる改良を目指したいという狙いでの発表だった。

114 巻 6 号（2007 年 3 月）と 115 巻 3 号（2007 年 8 月）を見ると、高橋康さんの**名古屋時代の昔話**と称する興味深い率直な証言がある。

同じ号には、また「**追悼 中村誠太郎先生**」がある。これは「素粒子論研究」創刊に奔走し、最初の編集長でもあった中村誠太郎さん（1913－2007 年 1 月）が亡くなった直後に、素粒子論研究編集部から追悼企画を依頼された私が、形式にとらわれず行われた葬儀の記録を載せていただくことにして、中沢宣也さんと編集したものである。

115 巻 1 号（2007 年 4 月）には、D. J. **グロスのノーベル賞講演**「漸近的自由場の発見と QCD の出現」の翻訳がある。また 116 巻 5 号（2008 年 12 月号）には、先に述べたように 2008 年 12 月に行われた**益川敏英さんのノーベル賞講演**の日本語版が掲載された。

117 巻 2 号（2009 年 6 月）には、浅野雅子さんが調べ、若手ワーキンググループ、素粒子論委員会、素粒子論懇談会などでの議論を経て発表が決まった「**1998 年度～2008 年度素粒子論グループ名簿によるポストク等の実態調査**」が掲載された。ここでは、若手の就職問題、オーバードクター問題、ポストク問題などと名前を変えて、安定した解決策が見つからないまま陽に陰に続いてきた問題が、今日、若手だけでなく、この分野全体の将来に影響を及ぼしている深刻な実態が明らかに示されている。

117 巻 5 号（2009 年 12 月）には、2008 年のノーベル物理学賞に関連して、**スウェーデン王立科学アカデミー物理部門が編集した資料「Broken Symmetries」**の翻訳がある。

119 巻 1 号（2011 年 5 月）を見ると、「ひろば」に、亀淵迪さん（述）と大貫義郎さん（補注）の「**戯劇‘GHOST 基研にあらわる’上演を巡って**」がある。この劇は 1955 年 11 月 29 日に、基研の「場の理論」研究会の懇親会の夜に上演された。私はその数日後に基研に行き、出演者たちから生き生きと当日の様子を

お聞きしたことを懐かしく覚えている。

「素粒子論研究」の全文は最初にも述べた様に、次節で紹介するアーカイブで読める。ぜひ直接これらの文章をご覧いただきたい。ほかにも興味深いものがあるが割愛させていただく。

4. ホームページ、著作権、アーカイブ、「素粒子論研究・電子版」の創刊

106 巻 1 号（2002 年 10 月）には、「素粒子論研究」**ホームページ**開設についての編集部のお知らせが載っている。アドレスは <http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~sokened/> である。

113 巻 3 号（2006 年 3 月）には、「「素粒子論研究」掲載論文等の**著作権**の委譲について」という編集部からのお知らせがある。これは、「素粒子論研究」のバックナンバー全文を、国立情報学研究所（NII）の**アーカイブ** CiNii（サイニイ＝NII 論文情報ナビゲータ）によって利用できるようにしたいという問題が起きた時に、著者から編集部への委譲が必要になったのであった。63 巻 4 号（1981 年 4 月）以後はすべて「素粒子論研究」編集部が著作権を持っていたのだが、創刊号から 63 巻 3 号（1981 年 3 月）までの著作権は著者にあることに気付いたのである。第三者が利用したい場合の許可を与える権利も編集部に移してもらわないと実際上運用できない。このため、113 巻 3 号のお知らせを掲載し、異論があれば、その論文については著者か著作権継承者が権利を持ち続けることにし、異論が出なければ、編集部が権利を行使することにしたのである。幸いにして、異論は 1 件も出なかったと聞いている。

その結果、素粒子論研究のバックナンバーを集めて、国立情報学研究所に提供することが出来、116 巻 1 号（2008 年 4 月）の「「素粒子論研究」**アーカイブ完成**のお知らせ」にある通り、

http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00135266_jp.html

で、素粒子論研究の創刊号からのすべての内容が、利用できることになった。

そして、118 巻 2 号（2010 年 8 月）に、「「素粒子論研究」の今後について」という編集長の問題提起が掲載され、3 分冊で発行される合計 877 ページのこの 2012 年 2 月号を以て冊子体刊行が終わり、オンラインジャーナルに移行することになった次第である。

5. 「素粒子論研究」の表紙

表紙のデザインについて何人かに聞かれたことがあるので、「素粒子論研究」の表紙について記録しておく。

25周年記念号に、元編集長の上田顕さんが「「素研」の表紙のことなど」¹⁴⁾を書き、それまでの「素粒子論研究」の表紙の変遷を書いているので、それ以前のことは簡単に触れるにとどめよう。1955～56年ごろ、上田さんは、木庭二郎さんから表紙に載せるカットを描くことを依頼され、山崎和夫さんから表紙のデザインを依頼されて、苦労の末できた表紙デザインが16巻1号（1957年10月）から使われた。25周年記念号の文章の最後に上田さんは「25周年を機会にどなたか新しいデザインに替えられてはどうだろうか。」と書いた。

実際は、その時に編集部から依頼してデザイン変更計画が進んでいた。その新しいデザインは50巻1号（1974年9月）に登場した。デザイナーは、油絵を描き、陶芸にも凝っていた河辺六男さんである。このデザインは、冊子体の最後のこの号、119巻4号（2012年2月）、まで使われてきた。

表紙の上下左右に4つのラテン語の格言がある。左上から時計回りに見ていくと、

NATURA EST ABUNDANS. (Nature is abundant.)

NATURA EST SIMPLEX. (Nature is simple.)

NATURA NON FACIT SALTUM. (Nature does not jump.)

NATURA EST FORMOSITAS. (Nature is beautiful.)

と書かれていて、それぞれの下に、その意味に関係するカットが置かれている。実際には格言よりカットのほうが目立っている。河辺さんは、ニュートンのプリンキピアの翻訳の機会にラテン語を学び、ラテン語の原書から翻訳した経験を持っていた。これらのカットに出典があるのかどうかを聞く機会はずいともてなかった。

6. 初期の「素粒子論研究」から見た素粒子論グループの発展

湯川先生は、中間子論の第1論文の最後に、核力の量子が見つかるのであれば、宇宙線シャワーの中だろうと書いた。この論文を、東大で開かれた日本数学物

理学会の常会で発表した時に、仁科先生に激励された¹⁵⁾。その後、中間子の理論と宇宙線の分析について、湯川先生と仁科先生は情報と意見の交換を続けていたが、1937年8月5日に、仁科先生が「アナタノ理論ノ帰結ニツイテ、又吾々ノ実験ト理論トノ関連並ニ論文等ニ就イテ、オ互ニヨク話シ合ッテ出来ルダケ吾国ニ於ケル理論並ニ実験ノ方ノ収穫ヲ多クスルタメニ、一度会合シテ討議ヲ行ッテハドウデショウカ。・・・ソレデ小林君其他ノ人ガ帰京スルノヲ待ッテ本月15日ト20日ノ間ニ1日当地デ相談会ヲ開イテハドウデショウカ」と提案した。湯川先生は7日に「誠に有難く存じます」と回答。理研原子核実験室で8月19日に、大阪からの湯川先生と坂田先生と、理研の理論と宇宙線の人たちが一堂に会して議論した¹⁶⁾。

これが元になって、1941年6月12日から1943年9月27日（あるいは1944年11月18、19日）までに、8回の非公式会合がかさねられた。名称は、理論の会、迷想会、メソン会、中間子懇談会、中間子討論会と変更され、参加者も全国的に広がり、規模も次第に大きくなった。これが素粒子論グループのルーツである¹⁷⁾。

この中で、1943年9月26—27日に理研講堂で開かれ、全国から約50名が参加した中間子討論会では、「討論のための報告」の詳しい予稿¹⁸⁻²²⁾が準備され、事前に参加者に送付され、前もって検討してもらった。さらに終了後、「討論」も含めた記録が作成された²³⁾。^(脚注)

素粒子論研究者は、この経験をもっていたので、1948年10月に開かれた日本物理学会素粒子論分科会を前にして、完全に自主的に83ページの

素粒子論研究

日本物理学会第3回素粒子論分科会講演予稿

1948年10月16日、17日 於 東京大学

を発行した。木庭二郎さんと中村誠太郎さんが発行具体化の中心だった。この

脚注：武谷さんは、中間子討論会の記録「素粒子論の研究 I」²³⁾の編集後記に「その後中間子討論会は部分的に空襲の始まる直前に渡辺慧氏が主催して東大第二工学部に於いて行われました。」と書いた。この会については湯川先生が研究室日記の中に、学術研究会議素粒子班発表会の会として、講演者名、講演題目を記録している¹⁷⁾。これを見ると、非公式の会と言えないだけでなく、討論の会というより、講演発表の会であり、中間子討論会の延長というべきかどうか疑問が残る。

号には朝永先生や南部さんの講演予稿を含む 29 編が掲載されている。ひき続いて、素粒子論研究Ⅱ、No.3、Ⅳが出たので、これが歴史に残る**創刊号**となった。第Ⅱ号は、創刊号に積み残した予稿を中心にして、19 論文と 13 編の海外からの書簡を載せて、間もなく出た。1948 年 4 月から 12 月 13 日付の書簡までが掲載されているから、発行日は書いてないが、翌年の初めに出たことは間違いでない。「海外通信」欄の書簡には、プリンストンに滞在中の湯川先生からの 6 通、朝永先生が受け取った 6 通（R. Oppenheimer, A. Pais, W. Heitler, W. Heisenberg, 湯川先生から）が含まれている。

No.3 に掲載された海外通信のうちの 20 通が湯川先生からの新情報であることを知れば、これも日本の素粒子論研究に対する湯川先生の大きな貢献の一つであるということが出来るだろう。

海外への渡航も自由、海外からの情報も自由に入ってくる今日と違ったので、海外に出かける人は積極的に情報を流す習慣が定着し、海外通信欄は、後まで定着し実によく読まれ続けた。^(脚注)

この 2 号の成功を受け、翌年 1949 年 4 月 28 日から 5 月 2 日にかけて東大で開かれた日本物理学会を前にして、「原報及びアブストラクト」14 編と「海外通信」26 通を掲載した No.3 が 1949 年 3 月に刊行され、翌月には草稿 45 編と海外通信 12 通が掲載されたⅣ号が出た。ここまでを、今日**第 0 巻**と呼んでいる。

創刊号から第Ⅳ号までわずか半年である。第Ⅳ号の表紙には「**素粒子論研究グループ**」の名前が登場した。私が知る限り、これ以前には「素粒子論グループ」という名称は、「素粒子論研究」以外を見ても、どこにも記録されていない。

第Ⅳ号には中村誠太郎さんが書いた編集後記がある。そこには、日本の研究が海外で高く評価されていることを謳歌する一方で、学会中の 5 月 2 日に**素粒子論懇談会**の予告があり、「近い将来に予想される研究の破壊にそなえて、我々の研究方法について真剣に皆様に考えて頂かねばならないと存じます。・・・席上でこの問題について御討議願います」と呼びかけている。

謳歌として引用している一つが、F.J. Dyson の The Radiation Theory of Tomonaga, Schwinger, and Feynman (Phys. Rev. **75** (1949) 486) の最初のページから次のページに続く 12 行の脚注である。

(脚注) : 海外通信は **72** 巻 6 号 (1986 年 3 月) を最後として、その後掲載されることはなかった。

After this paper was written, the author was shown a letter, published in *Progress of Theoretical Physics* **3**, 205 (1948) by Z. Koba and G. Takeda. The letter is dated May 22, 1948, and briefly described a method of treatment of radiative problems, similar to the method of this paper. Results of the application of the method to a calculation of the second-order radiative correction to the Klein-Nishina formula are stated. . . . All the papers of Professor Tomonaga and his associates which have yet been published were completed before the end of 1946. The isolation of these Japanese workers has undoubtedly constituted a serious loss to theoretical physics. (下線を付けたのは中村さん)

私は、この注を以前から知っていたのだが、今回日付を確かめて、驚いた。Dyson の論文が載った *Phys. Rev.* は 1949 年 2 月 1 日号であり、中村さんが編集後記を書いたのは 4 月 1 日である。当時の平均的スピードははるかに遅かったので、ここには日米のくりこみ理論を巡る熾烈な戦いが現れている。(もう一つ言うと Dyson のこの論文の受理の日付は 1948 年 10 月 6 日である。)

ここで一つ脱線させていただく。Dyson は、1979 年に発表した自伝 *Disturbing the Universe* の中に次のように書いた。

In the spring of 1948 there was another memorable event. Hans (Bethe) received a small package from Japan containing the first two issues of a new physics journal, *Progress of Theoretical Physics*, published in Kyoto. The two issues were printed in English on brownish paper of poor quality. They contained a total of six short articles. The first article in issue No.2 was called "On a Relativistically Invariant Formulation of the Quantum Theory of Wave Fields," by S. Tomonaga of Tokyo (Bunrika) University. Underneath it was a footnote saying, "Translated from the paper...(1943) appeared originally in Japanese." Hans gave me the article to read. It contained, set out simply and lucidly without any mathematical elaboration, the central idea of Julian Schwinger's theory. The implications of this were astonishing. Somehow or other, amid the ruin and turmoil of the war, totally isolated from the rest of the world, Tomonaga had maintained in Japan a school of

research in theoretical physics that was in some respects ahead of anything existing anywhere else at the time. He had pushed on alone and laid the foundations of the new quantum electrodynamics, five years before Schwinger and without any help from the Columbia experiments. . . . Tomonaga had taken the first essential step. There he was, in the spring of 1948, sitting amid the ashes and rubble of Tokyo and sending us that pathetic little package. It came to us as a voice out of the deep.²⁴⁾

話を元に戻そう。1949年5月2日に開かれた素粒子論懇談会で、今後日本物理学会の刊行物にしてもらおうということになった。当時物理学会事務局は東大物理学教室内にあり、図書室職員が兼務していた。山内恭彦日本物理学会委員長（現在の会長）の尽力によって委員会（現在の理事会）の承認が得られて、1巻1号として1949年8月5日に発行された。編集者兼発行者は中村さん、発行所は日本物理学会だった。ここで、隔月刊として1号ごとに東京と京都で交代して編集するという持ち回り方式が確認された。

次の号は、京都担当で、井上健さんが責任者で秋の分科会以前に配布することを目指したが、間に合わなかった。

1巻3号では、1949年11月10日付の中村さんの名前で、「**素粒子論グループ研究連絡組織**」という題の、次のような重要な委嘱が行われた²⁵⁾。

北大から九大までの大きい9大学に地方責任者を置く。東京文理大の支部として科学研究所（理研）と中央气象台、東大理学部の支部として立教大と東大理工学研究所、京大小林研の支部として湯川研と荒木研、阪大理学部の支部として大阪市大と神戸大、広島大の支部として広島大理論物理研（竹原）。それぞれの支部の責任者を指名。これによって国内の素粒子論研究者は事実上全員がネットワークに組み込まれた。

委嘱内容は3項目。

- 1 海外通信、国内の研究に関する短いニュースを、タイプ、プリントして、他の8地方責任者に送る。
- 2 海外または国内の研究論文（長いもの）は、各地方責任者のところで、アブストラクトを8部作って、他の8地方責任者に送る。特に

重要なものは、全文コピーを8部作って送るか、プリント計画を作る。全文入手希望者に対して適当な処置をしていただく。

- 3 全文コピー、プリントは、どこが担当してつくるか、事前に9地方の間で調整し、重複を避ける。

この号には、当時中央气象台にいた早川幸男さんが、東京の有志や木庭さんの意見を参考にしたとして、長文の編集後記を書き、「素粒子論研究」と物理学会の会合の活性化と質的向上を提案し、定員をはみ出し、大勢の無給大学院生を抱えている現状を心配している。

1950年の夏には、プリンストンから朝永先生が、コロンビア大から湯川先生が相次いで帰国した。湯川先生はノーベル賞受賞後初めての一時帰国だった。全国から多数の人が出席してこの二人を囲んだ会の、質疑・討論も含めた速記記録が、先に述べたように、2巻4号(1950年8月)と5号(1950年9月)に載っている。湯川先生と朝永先生のほほえましいやり取りや、20人以上の学者一人一人についての湯川先生の率直な印象は、今読んでも新鮮である¹²⁻¹³⁾。

3巻1号(1951年2月)には、「素粒子論研究」の内容を充実させるための「討論」欄が設けられた。討論というより「素粒子論研究」に載った論文の批評である。この号の筆者は山口嘉夫さん。「二番煎じが大部分、どいつもこいつも easy going」という辛口。この号の編集後記で、中村さんは、月刊誌を目指すために、名古屋と大阪に編集担当の可能性を打診している。また、毎日新聞社から毎月出版費の寄付をもらうことになったと、感謝を書いている。

東京と京都の1号ごとの担当交代は3巻6号(1951年12月)まで続いた。東京ではどうしても中村さんに頼りがち。京都では井上さんが周囲の人たちに次々に協力してもらったので、特定の人への大きい負担はなかったようだが、馴れずに毎号のように発行が遅れた。

3巻4号(1951年9月)には小谷正雄先生から東大素粒子論研究室²⁷⁾と坂田昌一先生²⁸⁾への書簡が載っている。1951年7月には、コペンハーゲンでIUPAP(国際純粋応用物理学連合)総会があり、あわせて量子物理学国際会議が開かれた。坂田先生は、小谷先生たちとともに、これらの会議への日本学術会議からの代表に指名されたが、日本学術会議25年史によると、「GHQより、「好ましいとは考えない」ということで、出国できなかった」²⁹⁻³⁰⁾。小谷先生は原子・分子理論の専門家なのだが、東大素粒子研に素粒子の詳細な実験結果なども含めて量子物理学の報告を送ってきたのは、見事である。坂田先生への書簡では、

いつ遅れて到着するか最後まで気をもんでいた様子が書かれているほか、「日本で 1953 年に IUPAP 主催の学会を開くことが承認されました」と速報してきた。これが、1953 年の理論物理学国際会議に結実することになる。

3 巻 6 号 (1951 年 12 月) には荒木源太郎さんの「本誌の性格について」というお知らせが載っている。それによると、日本物理学会では 1951 年 7 月 14 日の委員会議 (現在の理事会) で細則を変更して特別委員会規定を作り、その一つとして、同日素粒子委員会を設置した。「素粒子論研究」の編集はこの委員会でやることになったので、委員予定者が 1951 年 12 月に 2 回集まって「本誌の性格」を議論した。ほとんどは従来の実績を追認しているのだが、新しいことは、掲載論文の位置づけと引用の仕方である。

審査をせずに自由に投稿できるということとの関係で、掲載内容は

- (a) 素粒子論研究者間の素粒子論研究上の私的な手紙
- (b) 素粒子論についての学術的会合における講演の予稿
- (c) 研究連絡に関する事項 (文献紹介、抄録を含む)
- (d) 素粒子委員会の決定事項および連絡事項
- (e) 研究者の意見
- (f) その他素粒子委員会が適当とみとめたもの

とされた。その結果、本誌に載せた論文は、本誌内の引用は自由だが、正式論文には引用しない。もし引用したい場合には、private communication とする。

4 巻 1 号 (1952 年 2 月) に、素粒子委員会報告が荒木源太郎委員長の名前で掲載された。その最初には、「**日本学術会議原子核研究連絡委員会素粒子論分科会で、素粒子論研究者を組織化し、その連絡を緊密に研究協力の実効をさらに向上させようという案ができました。**」と書かれている。そしてこの分科会委員と物理学会委員 (現在の理事) が度重なる協議を重ねた結果、素粒子委員会委員の人選は、学術会議の委員会で行い、荒木さんが日本物理学会の素粒子委員会委員長になって、ほとんど前号で報告した通り決定した。さらに、この年から、神戸大、名古屋大、大阪市大が編集に加わり、月刊にすることも発表された。

4 巻 4 号 (1952 年 5 月) には 1952 年 4 月 3 日に行われた素粒子論懇談会からのお知らせが掲載されている。ここに、素粒子論グループ中央連絡事務局が京大におかれ、<通知 No. 1> が各地に送られたことが書かれている。これが今日に続く **素粒子論グループ事務局の発足** である。

この懇談会では、「無給者の研究条件改善」、「少人数の研究機関の援助」、湯

川記念館の活用と、卒業からある年数以内の場合に他大学出身者を採用することによる「研究者の交流」なども議論された。

この年の7月に、かねてから準備を進めていた**京都大学湯川記念館**が完成した。研究部（朝永振一郎部長）と事業部（小林稔部長）が決まり、学内措置として助手2名の採用が認められた。朝永先生は日本学術会議原子核研究連絡委員会委員長として京大側と、湯川先生のノーベル賞の記念事業の内容を詰めてきた。湯川記念館では、朝永研究部長の下で助手の人事選考が行われた。1946年に湯川先生が個人で創刊したProgress of Theoretical Physicsを刊行してきた理論物理学刊行会は湯川記念館の中に移った。そこでそれまで各地の研究者が持ち回りで行ってきた事務を軽減するために、「**素粒子論研究**」の**集金と雑誌発送の事務を理論物理学刊行会に依頼**することになった。

4巻8号（1952年8月）には、発足した湯川記念館で開催された夏季学校の機会の7月28日に、1階のサロンで開かれた懇談会の記録が掲載されている。これを見ると、

- I 科学研究費総合研究班の研究費配分方法
- II 翌年度の大規模なゼミナールについて
- III 武者修行費の運営について
- IV 湯川記念館の運営について（小林さんから詳しい説明）
- V 国際理論物理学会の招待予定者について（朝永先生から発表）
- VI 素粒子論グループ事務局の（抽選による）名古屋大への引き継ぎ

が議論されて、実質的に決まっていたことがわかる。素粒子論グループは直接民主主義の実践の場だったのである。

京都大学での組織名であり、建物の名前でもあった湯川記念館は、翌1953年の基礎物理学研究所発足後は、建物の名称として今日まで受け継がれることになった。

「素粒子論研究」の編集長は、4巻12号（1952年12月）から吉田思郎さんが担当し、基礎物理学研究所発足以後も、その所員が今日まで引き継いで担当してきたのである

このような経過によって、形式的に日本物理学会素粒子委員会の仕事とされた「素粒子論研究」の編集・発行は、一貫して素粒子論グループによって行われてきた。

刊行頻度についてみれば、基本的に隔月刊が1951年まで続き、1952年か

ら月刊になったが、ページの増加が続いたため、1953年6月から1冊110ページに制限した。その結果月に2冊、3冊発行される事態が続くことになった。月間に戻るのは1958年のことであり、これが2007年3月まで続いた。原稿の減少によって2007年4月から2010年3月まで隔月刊、2010年4月から2012年3月までが季刊だったのである。

話しを戻すと、4巻9号（1952年9月）には、この号の投稿は学会予稿が主だと書いているが、これ以後日本物理学会が講演予稿集を刊行するようになったので、物理学会講演予稿集としての「素粒子論研究」の役割はなくなった。

1948年から今日までの間に、学術情報流通の環境は激変した。今日ではだれが見ても「素粒子論研究」の速報性は失われている。

その中で、現在冊子版に書かれている、

「素粒子論研究は自由にかつ気楽に研究や意見を発表することを主な目的にしています」

と、電子版に書かれている、

「投稿内容は、素粒子論グループメンバーにとって利益があると判断されるものならなんでも構いません。」

という特色は、何ら変更する必要がないまま、続いている。

私が、この文の最初に提案した趣旨は、これを維持したいという点にあった。

そして、初期の「素粒子論研究」がいかにより多くの研究者によって支えられ、発展してきたかを見れば、今後進むべき道はおのずから決まってくると信じている。

最後になったが、素粒子論研究編集部事務を支えてきた歴代の職員に心から感謝したい。特に、野坂京子さんは、1999年の「『素粒子論研究』の50年」のとりまとめに多大の貢献をしてくれたが、今回もそれに劣らず、尽力してくれた。理論物理学刊行会の解散後のご多幸を祈りたい。

参考文献

- 1) 特集 「25周年を迎えた「素粒子論研究」」、素粒子論研究 **48** 巻2号（1973年10月）194－223
- 2) 特集 2 「25周年を迎えた「素粒子論研究」（続）」、素粒子論研究 **48** 巻3

号（1973年11月）308—311

- 3) 「素粒子論研究」総目録 創刊号（1948年10月）—50巻6号、（1976年3月）i—ii、素粒子論研究、52巻7号（1976年2月）353—603
- 4) 「素粒子論研究」ホームページの「バックナンバーリスト」に21巻1号（1960年3月）以後の目次がある。
<http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~sokened/>
- 5) 湯川記念館史料室、「『素粒子論研究』の50年」、素粒子論研究 100巻2号（1999年11月）105—166；訂正 103巻4号（2000年1月）116
- 6) 細谷暁夫、「戦後に生まれ、物理を志して」、物性研究 97巻2号（2011年11月）194—205 および
 鹿野豊、「光子の裁判」再考」、物性研究 97巻2号（2011年11月）206—215
- 7) 政池明、「第2次大戦下の京都帝大における原子核研究とその占領軍による捜索」、原子核研究 55巻1号（2010年9月）76—89；55巻2号（2011年3月）89—102
 この文は「原子核の温故知新」シリーズに載った。このシリーズのほかのものも興味深い。
- 8) 「特集 東日本大震災復旧報告」、原子核研究 56巻（2011年9月）79—120
- 9) 益川敏英、「C P対称性の破れが我々に語ったこと」、素粒子論研究 116巻5号（2008年12月）151—158
- 10) 矢野忠、「武谷三男博士の業績リスト（第3版）」、素粒子論研究・電子版 5巻1（2010年10月）
- 11) 矢野忠、「武谷三男博士の著作目録（第3版）」、素粒子論研究・電子版 5巻2（2010年10月）
- 12) 「8月14日会合の記録」、素粒子論研究 2巻4号（1950年8月）193—200 <これは米国から帰国した湯川さん、朝永さんを囲んで、1950年8月14日に上野の日本学士院でおこなわれた素粒子論討論会の記録>
- 13) 「湯川秀樹博士の講演と討論」、素粒子論研究 2巻5号（1950年9月）191—201 <これは、東京での会に続き、1950年8月22日に京大で行われた非局所場理論の講演会の記録>
- 14) 上田顕、「「素研」の表紙のことなど」、素粒子論研究 48巻2号（1973年10月）202—205 および

- A. U. 生（上田顕）、「表紙「失敗」の言葉」、素粒子論研究 **16** 巻 1 号（1957 年 10 月）98—99
- 15) 「湯川秀樹日記 昭和九年：中間子論への道」、朝日新聞社、2007 年、158
- 16) 中根良平、仁科雄一郎、仁科浩二郎、矢崎裕二、江沢洋編「仁科芳雄往復書簡集Ⅱ」、みすず書房、2006 年。601—613
- 17) 河辺六男、小沼通二、「中間子論の誕生」、日本物理学会誌、**37** 巻 4 号（1982）265
- 18) 朝永振一郎、「中間子と核粒子との相互作用 第一部 切断仮説に基づく考察」、中間子論討論会原稿、昭和 18 年（1943 年）6 月
- 19) 荒木源太郎、「中間子理論は一つの形式でうまくゆかぬか」、中間子討論会原稿、昭和 18 年（1943 年）8 月
- 20) 坂田昌一、「素粒子論に於ける模型の問題」、中間子論討論会予稿、昭和 18 年（1943 年）9 月
- 21) 玉木英彦、「宇宙線の本質と中性微子損失」、「カスケード理論に就いて」、中間子討論会予稿、昭和 18 年（1943 年）9 月
- 22) 武谷三男、「中性中間子に就て」、中間子討論会予稿、昭和 18 年（1943 年）9 月
- 23) 素粒子論研究会編、「素粒子論の研究 I」、岩波書店、1949 年
- 24) F. J. Dyson, *Disturbing the Universe*, Harper and Row, Publishers, Inc., New York (1979) p.57 翻訳は、ダイソン、「宇宙をかき乱すべきか—ダイソン自伝—」、ダイヤモンド社、(1982) 81—82 ページ
- 25) 中村誠太郎、「素粒子論グループ研究連絡組織」、素粒子論研究 **3** 巻 3 号 2（1949）135。100 巻 2 号（1999）134 ページに再録。
- 26) 山口嘉夫、「討論」、素粒子論研究 **3** 巻 1 号（1951 年 2 月）232—234
- 27) 小谷正雄、海外通信 東大素粒子研へ、素粒子論研究 **3** 巻 4 号（1951 年 9 月）304—310
- 28) 小谷正雄、海外通信 坂田昌一へ、素粒子論研究 **3** 巻 4 号（1951 年 9 月）310—314
- 29) 「日本学術会議 25 年史」、日本学術会議 25 周年記念事業会、1974 年、38 ページ
- 30) 「坂田昌一—コペンハーゲン日記」、ナノオプトニクス・エナジー、2011 年

付録： 素粒子論研究 100巻から119巻までの資料

0巻から99巻までは 100巻2号の「『素粒子論研究』の50年」の134～162ページに掲載

巻	号	通巻	発行年	月	頁 数		備 考
100	1	631	1999	10	A61	1～74	『素粒子論研究』の50年 (湯川記念館史料室 河辺六男)
	2	632		11		75～166	
	3	633		12	C134	167～173	
	4	634	2000	1	D87		
	5	635		2	E188		
	6	636		3	F31	177～193	
	計					501 + 193 = 694	
101	1	637		4	A16	1～109	
	2	638		5	B104		
	3	639		6	C3	111～202	
	4	640		7	D3	203～311	
	5	641		8	E128		
	6	642		9	F90	313～322	
	計					344 + 322 = 666	
102	1	643		10	A121		
	2	644		11	B99	1～22	
	3	645		12	C151		
	4	646	2001	1	D94	23～44	
	5	647		2	E232	45	
	6	648		3	F144	47～49	
	計					841 + 49 = 890	
103	1	649		4	A201		ひろば「湯川博士の物理学」(田中正)
	2	650		5	B38	1～93	
	3	651		6	C112	95～114	
	4	652		7	D130	115	
	5	653		8	E158		
	6	654		9	F61	117～173	
	計					700 + 173 = 873	
104	1	655		10	A93		梁成吉さんを偲んで(川上則雄)
	2	656		11	B82	1～67	
	3	657		12	C114	69～74	
	4	658	2002	1	D77	75～136	
	5	659		2	E95	137～164	
	6	660		3	F138	165～166	
	計					599 + 166 = 765	
105	1	661		4	A131		Women in Physics 準備調査研究
	2	662		5	B25	1～52	
	3	663		6	C113		
	4	664		7	D120		
	5	665		8	E32	53～99	
	6	666		9	F44	101～156	
	計					465 + 156 = 621	
106	1	667		10	A6	1～77	「素粒子論研究」 ホームページ開設について
	2	668		11	B127		
	3	669		12	C109		
	4	670	2003	1	D77	79～95	
	5	671		2	E39	97～129	
	6	672		3	F50	131～179	
	計					408 + 179 = 587	

巻	号	通巻	発行年	月	頁 数	備 考		
107	1	673		4	A88			
	2	674		5	B119			
	3	675		6	C96			
	4	676		7	D74	1~18	武谷三男博士の業績リスト(矢野忠)	
	5	677		8	E91			
	6	678		9	F89	19~29		
	計				557 + 29 = 586			
108	1	679		10	A43	1~43		
	2	680		11	B44	45~110		
	3	681		12	C80	111~120		
	4	682	2004	1	D88			
	5	683		2	E82	121		
	6	684		3	F107	123~125		
	計				444 + 125 = 569			
109	1	685		4	A87			
	2	686		5	B73	1~33	武谷三男博士の著作目録(矢野忠)	
	3	687		6	C92			
	4	688		7	D104			
	5	689		8	E44	35~98		
	6	690		9	F95	99~100		
	計				495 + 100 = 595			
110	1	691		10	A6	1~77	武谷三男博士をめぐる回想(矢野忠)	
	2	692		11	B97			
	3	693		12	C96			
	4	694	2005	1	D84			
	5	695		2	E95	79		
	6	696		3	F110	81~83		
	計				488 + 83 = 571			
111	1	697		4	A4	1~90	小川修三博士のプロフィール(矢野忠) 武谷三男博士の業績・著作補遺(矢野忠)	
	2	698		5	B87	91~103		
	3	699		6	C101			
	4	700		7	D99	105		
	5	701		8	E68	107~116		
	6	702		9	F57	117~173		
	計				426 + 173 = 599			
112	1	703		10	A86			
	2	704		11	B98			
	3	705		12	C100			
	4	706	2006	1	D74	1~11		
	5	707		2	E86	13		
	6	708		3	F236	15~16	学問の系譜 —アインシュタインから湯川・朝永まで—	
	計				680 + 16 = 696			
113	1	709		4	A108	1~2		
	2	710		5	B107	3~4		
	3	711		6	C126	5	牧二郎記念シンポジウム 「素粒子論研究」掲載論文等の著作権の 委譲について	
	4	712		7	D2	7~83		
	5	713		8	E102	85~126	小川修三さんの人と学問 「基礎物理学研究所 設立と将来」 (五十嵐尤二、登谷美穂子) 基礎物理学に関する年表 (ver.2006.8.1)	
	6	714		9	F105	127~133		
	計				550 + 133 = 683			

巻	号	通巻	発行年	月	頁数		備考
114	1	715		10	A19	1~32	
	2	716		11	B126		
	3	717		12	C141		
	4	718	2007	1	D106		
	5	719		2	E161	33	
	6	720		3	F98	35~78	昔話 名古屋における場の理論 (高橋康) 追悼 中村誠太郎先生
	計				651 + 78 = 729		
115	1	721		4	A114	1~35	ノーベル賞講演「漸近的自由場の発見と QCDの出現」D. J. Gross
	2	722		6	B97	37~129	
	3	723		8	C115	131~159	私が名古屋大学の学生だった頃前後 (高橋康)
	4	724		10	D113	161~208	
	5	725		12	E13	209~263	
	6	726	2008	2	F404	264~268	基礎物理学の現状と将来 —学問の系譜・湯川・朝永をうけて—
	計				856 + 268 = 1,124		
116	1	727		4	A185	1	「素粒子論研究」アーカイブ完成のお知らせ
	2	728		6	B153	3~4	
	3	729		8	C156		
	4	730		10	D3	5~149	
	5	731		12		151~190	ノーベル賞講演「CP対称性の破れが我々に 語ったこと」益川敏英 武谷三男博士の業績リスト、著作目録 (第2版) (矢野忠)
	6	732	2009	2	F138	191~194	
	計				635 + 194 = 829		
117	1	733		4	A88	1	
	2	734		6	B29	3~32	1998~2008年度素粒子論グループ名簿 によるポストドク等の実態調査 (浅野雅子)
	3	735		8	C116		
	4	736		10	D175	33	
	5	737		12	E132	35~60	2008年ノーベル賞関連資料 「Broken Symmetries」
	6	738	2010	2	F97	61~64	
	計				637 + 64 = 701		
118	1	739		5	A184	1~61	
	2	740		8	B3	63~259	「素粒子論研究」の今後について (編集長)
	3	741		11	C107		
	4	742	2011	2	D219	261~267	朝永先生と対称性 (大貫義郎)
	計				513 + 267 = 780		
119	1	743		5	A167	1~8	戯劇'Ghost基研にあらわる'上演を巡って (亀淵迪、大貫義郎)
	2	744		8	B78	9~108	米沢穰さんに聞く (矢野忠)
	3	745		11	C86	109~136	
	4A	746	2012	2	D293	137~145	冊子体最終号を3分冊で発行
	4B	747		2	E197	147~245	
	4C	748		2	F181	245~342	紙の雑誌「素粒子論研究」の終焉 (小林激郎) 「素粒子論研究」の65年: 1948-2012 (小沼通二) 時代の変化に翻弄された10年 (笹倉直樹) 「素粒子論研究」の最終号によせて (野坂京子)
	計				1002 + 342 = 1,344		

編集責任者

福間 将文 1993年10月号から 2002年3月号まで
 笹倉 直樹 2002年4月号から 2012年2月号まで

発行部数

99巻までの発行部数は、100巻2号の「『素粒子論研究』の50年」の
 128～129ページに掲載

年度	巻	号						巻小計
		1	2	3	4	5	6	
1999	100	460	460	460	460	460	460	2,760
2000	101	450	450	450	450	450	450	2,700
	102	450	450	450	440	440	440	2,670
2001	103	430	420	420	420	440	420	2,550
	104	420	420	420	410	410	410	2,490
2002	105	410	410	410	490	410	410	2,540
	106	410	460	410	400	400	400	2,480
2003	107	390	440	390	390	470	390	2,470
	108	390	390	390	410	390	390	2,360
2004	109	430	380	380	380	380	460	2,410
	110	380	380	380	380	380	380	2,280
2005	111	360	350	440	350	350	350	2,200
	112	350	370	350	350	350	430	2,200
2006	113	330	380	380	320	350	320	2,080
	114	320	350	320	320	320	320	1,950
2007	115	310	310	310	310	310	400	1,950
2008	116	310	310	310	310	310	300	1,850
2009	117	290	300	300	350	320	300	1,860
2010	118	290	290	290	290	—	—	1,160
2011	119	280	280	280	280	—	—	1,120

* 基本的に発行部数は減少しているが、投稿者より注文があった場合に増冊

個人定価 81巻～117巻 (1990～2009) 600円
 (1冊あたり) 118巻～119巻 (2010～2011) 800円

発行回数 17巻～114巻 (1958～2006) 年12回
 115巻～117巻 (2007～2009) 年6回
 118巻～119巻 (2010～2011) 年4回